

### 小学校事例3

『いのち』生き生き』 - 家族や地域の人と共に学ぶ「いのちの学習」 -

たつの市立香島小学校第5学年

#### 1 テーマ

『いのち』生き生き』 - 家族や地域の人と共に学ぶ「いのちの学習」 -

#### 2 実践のねらい

生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を大切にしていこうとする意欲を持つ。

#### 3 テーマ設定の理由

##### (1) 本校の概要と児童生徒の実態

たつの市の最北部に位置する本校校区は、その中央を揖保川が流れ、山と田園に囲まれた自然豊かな地域である。三世同居の家庭が多く、地域の方々は学校教育活動やPTA活動に協力的である。

そのような環境で育った児童は、純朴で優しい子が多い。しかしながら、時には、人を傷つけるような言動があったり、自分本位の考えから人の立場を思いやる気持ちに欠けた行動をとったりすることもある。「自分に厳しく、人にやさしく」とか「自分も人も同じように大切にしよう」といった言葉が言葉だけに終わり、頭では分かっているものの、いざとなれば行動にうつすことができない現状があり、命の学習の必要性を感じ、本テーマを設定した。

##### (2) 指導のポイント

###### 【感動の体験】

- ・親子で生い立ちを振り返りながら「私の11年史」をつくることをとおして、共に生きていくことの喜びを実感させる。
- ・卵殻を育てる活動をおして、命を育むことの大変さや命の愛おしさを体感させる。
- ・乳幼児とのふれあい体験をおして、命のぬくもりを体感させる。
- ・病気と闘う子どもの姿をおして、生きることの尊さを実感させる。

###### 【感性を育む】

- ・命を守り育てることの喜びや苦労を感じ取らせる。
- ・命の尊さを感じ取らせ、自分を支えてくれている周囲の人に感謝の気持ちを持たせる。
- ・命を支える人々の姿をおして、自分もまた支えられて生きていることに気づかせる。
- ・アニメやテレビゲーム等における仮想現実での死と現実の死の違いに気づかせる。

###### 【想像力の育成】

- ・子どもの誕生や成長によせる親の思いを想像させ、自分の将来について考えさせる。
- ・命はつながり受け継がれていくものであるということを理解させる。
- ・限りある命を全うしようと精一杯生きていくことの素晴らしさを実感させる。
- ・「死」を軽率にとらえず、自他の命を大切に生きていくことについて、自分なりの考えを持たせる。すべての生き物には寿命があり、自分の命も例外でないことを理解させる。

#### 4 事前

##### (1) 先生の準備

- ・様々な教育活動が、「いのちの学習」に結びつくような視点をもって、計画したり実施したりする。
- ・日頃から、資料を集めたり人材を見つけ出したりしようとする姿勢をもっておく。
- ・活動への協力者や関係者との事前打ち合わせを十分に行う。

##### (2) 教育課程上の位置づけ

- ・主に、道徳と総合的な学習の時間に位置づける。

## (3) 子どもたちの準備

- ・「私の11年史」づくりに向けて、生い立ちを家族から聞いたり、資料を集めたりする。
- ・「卵殻を育てる」活動に向けて、卵殻を用意する。

## (4) 家庭・地域との連携

- ・学習内容を学級通信等で知らせ、保護者に趣旨を理解してもらうとともに、活動への協力を得られるようにする。
- ・「私の11年史」づくりに際して、配慮を要する児童については、特に家庭との連絡を密にする。

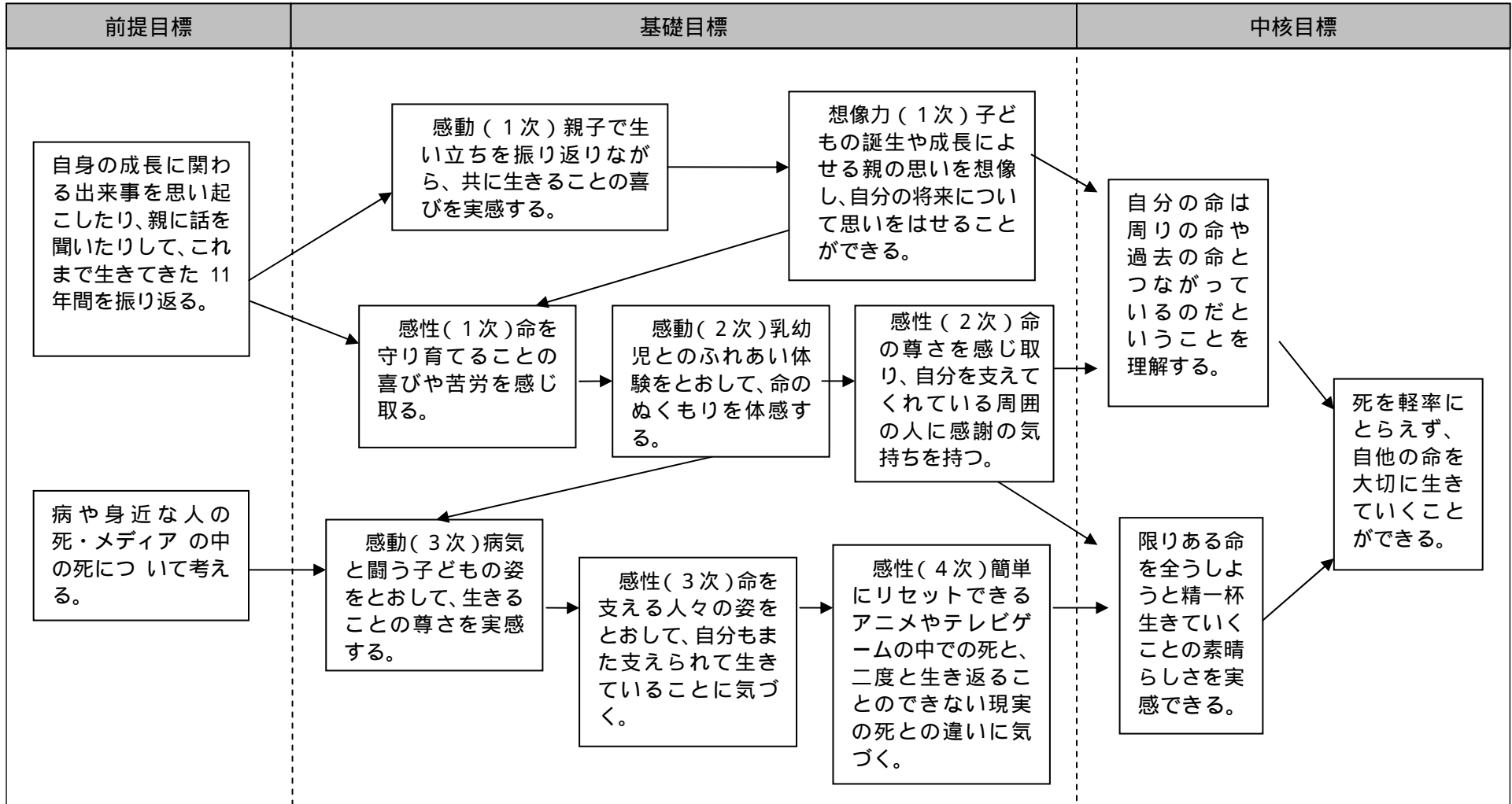
## 5 本校の実践の特色

本校では、特別活動や総合的な学習の時間において、地域との交流を深めている。中でも10月にある「香島っ子ふれあいカーニバル」では、全校児童がいくつかの講座に分かれ、地域の方を先生にいろいろなことを学んでいる。また、5年生の児童においては、「下笹に田んぼ水族館を作ろう」の学習で、ビオトープ作りを目標に、地域の方と一緒に、水田における水生生物の数と農薬の量の関係を調べたり、稲刈り前の水田から水が落ちて無くなる前にメダカをはじめとした生き物を救出しようと取り組んだりして、身近な動植物の命について考えている。

6 目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
1次 (7時間)	「私の11年史」を作る。 卵殻を育てる。 ・3日間、学校でも家庭でも、卵殻を割らないように注意を払いながら、身に付けておく。	親子で生い立ちを振り返りながら、共に生きることの喜びを実感する。 卵殻に、名前を付けたり顔を描いたりして育てることをとおして、命のいとおしさを実感する。	自分の命は両親の願いの結晶であり、その命を大切に生きていくことの素晴らしさに気づく。 命を守り育てることの喜びや苦勞を感じ取る。	子どもの誕生や成長によせる親の思いを想像し、自分の将来について思いをはせることができる。 親の立場に立って、子育ての喜びや素晴らしさ、大変さを想像できる。	自分を取り巻く人々の思いを想像させ、感謝の気持ちを持たせることができたか。 命を育てることの素晴らしさや苦勞を感じ取らせることができたか。
2次 (4時間)	乳幼児とふれ合う。 「寿命」について考える。 ・『十歳のきみへ』(日野原重明著 富山房インターナショナル)を読み、感想を話し合う。	乳幼児とのふれあい体験をとおして、命のぬくもりを体感する。 限りある命を精一杯生きることの素晴らしさを感じる。	命の誕生の不思議さやかけがえのなさを感じ取る。 命の有限性について考える。	自分の命は、周りの命や過去の命とつながっているのだということを理解する。 命の尊さを感じ取り、自分を支えてくれている周囲の人に感謝の気持ちを持つ。	命のぬくもりを感じさせることができたか。 自分の命は一人だけのものではなく、つながり受け継がれていく(きた)ものであることに気づかせることができたか。
3次 (6時間)	高齢者とふれ合う。 デイケア施設で働く方の話を聞く。 「病」について考える。 ・『種まく子供たち』(佐藤律子編 ポプラ社)を読み、感想を話し合う。	地域の高齢者との交流を通して、人は支え合って生きていることを実感する。 病氣と闘う子どもの姿を通して、生きることの尊さを実感する。	死や老について考えることの大切さに気づく。 命を支える人々の姿をとおして、自分もまた支えられて生きていることに気づく。	限りある命を全うしようと精一杯生きていくことの素晴らしさを実感できる。	支え合い、励まし合って 生きることの大切さを理解させることができたか。 生きていることは当たり前のことではなく、素晴らしいことであると気づかせることができたか。
4次 (3時間)	身近な死について話し合う。 メディアの中の暴力や死の表現について話し合う。	身近な人の死について語り合い、現実の死のもつ悲しみを感じる。	死の重みを感じ取る。 簡単にリセットできるアニメやテレビゲームの中での死と、二度と生き返ることのできない現実の死の違いに気づく。	死を軽率にとらえず、自他の命を大切に生きていくことを考えることができる。	仮想現実での死と現実の死の違いを理解させることができたか。 自他の命を大切にすることについて、自分なりの考えを持たせることができたか。
事後	ノーテレビデーを体験する。				

7 目標構造図



(凡例) 感性(1次):「 」は指導の順序、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「(1次)」は学習活動が「1次」であることを示す。

8 事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修

研修内容	
a	自己再発見の研修 <span style="float: right;">&lt; 提言 P68：教員研修テーマ &gt;</span> 1 「自分史」づくり体験をする。 2 『十歳のきみへ』（日野原重明著 富山房インターナショナル）を読む。
b	「卵殻を育てる」体験をする。
c	死と向き合う人々から学ぶ研修 ・『種まく子供たち』（佐藤律子編 ポプラ社）を読む。
d	メディアの中の「死」についての研修 ・子どもとテレビゲームとのかかわりについて

(2) 指導の概要（全 20 時間）

内容		
1 次 (7 時間)	1 「私の 11 年史」を作る。 (第 1～5 時) 家族の話の聞いたり写真等の資料を集めたりして、「私の 11 年史」を作る。 (第 6 時) 「私の 11 年史」展示会を行う。 (6 時間)	教員研修 a - 1
	2 卵殻を育てる。 (第 1 時) 卵殻を育てるうえでの工夫点や留意点を話し合う。 (課 外) 3 日間、学校でも家庭でも、卵殻を割らないように注意を払いながら育てる。 (1 時間 + 課外 3 日間)	教員研修 b
2 次 (4 時間)	1 乳幼児とふれあう。 ・胎児の様子(超音波撮影による動画)を見る。 ・「私の 11 年史」を見直し、自分の幼い頃を想起する。 ・乳幼児とともに遊ぶなどして、ふれあう。 (1 時間)	教員研修 a - 2
	2 「寿命」について考える。 ・『十歳のきみへ』（日野原重明著 富山房インターナショナル）を参考に、寿命やよりよい生き方について話し合う。 (3 時間)	
3 次 (6 時間)	1 高齢者とふれあう。 ・「年齢の物差し」を使って、年を経た自分を想像する。 ・高齢者に教えてもらったり、ともにゲームをしたりしてふれあう。 (2 時間)	教員研修 c
	2 デイケア施設で働く人の話を聞く。 (1 時間)	
	3 「病」について考える。 ・『種まく子供たち』（佐藤律子編ポプラ社）を読み、精一杯生きることの尊さや限りある命を全うしようと生きることの素晴らしさについて話し合う。 (3 時間)	
4 次 (3 時間)	1 「死」について話し合う。 (1 時間) ・身近な人の死に接した友だちの話を聞いたり、親から話を聞いたりして、現実の死について話し合う。	教員研修 d
	2 メディアの中の暴力や死の表現について話し合う。 ・普段よく見るアニメやテレビゲームの暴力や死の表現について話し合う。 ・仮想現実での死と現実の死の違いを話し合う。 (2 時間)	
事後	ノーテレビデーを体験をする。	

9 指導実践

(1) 1 次第 1 時～ 6 時

ア 本時のねらい

自分の生い立ちを振り返り「私の 11 年史」を作ることとおして、自分を取り巻く人々の思いや自分がかけがえのない存在であることに気づき、感謝の気持ちを持つとともに、命を大切に生きていこうとする意欲を持つ。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

家族で生い立ちを振り返りながら、共に生きることの喜びを実感させる。

(イ) 感性を育む

自分の命は両親の願いの結晶であり、その命を大切に生きていくことの素晴らしさに気づかせる。

(ウ) 想像力の育成

子どもの誕生や成長によせる親の思いを想像し、自分の将来について思いをはせさせる。

ウ 準備物 教員自身の自分史

エ 先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ア) 学級通信等を通じて、子どもたちが、これまで大事に育てられてきたことや今も家族の愛情に包まれて生活していることを意識させたい旨を伝え、保護者に協力を依頼する。

(イ) 事前指導

- ・準備物（写真等）の確認
- ・写真等の取り扱い方の指導

オ 展開（6 時間）

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 「私の 11 年史」の制作の進め方（完成までの日程、準備物等）や留意点を聞く。	・家族の助言や助力を、最大限生かして制作するように話す。
	2 どのような「私の 11 年史」にしたいか話し合う。 ・日記風にするか、年表風にするか ・写真や挿絵の使用について	・できるだけ子どもの発想を大切にしながら、完成までの日程を考えて制作するように留意させる。 ・写真の使用に際しては、必ず保護者の許可を得るようにさせる。
展 開	3 11 年間の振り返り、おおまかな構想を練る。	
	4 「私の 11 年史」を作る。	
	5 「私の 11 年史」展示会を行う。	
	「私の 11 年史」を作った感想を話し合おう	
	・アルバムを全部出して、家族みんなでいい写真を探していたとき、おもしろい写真がいっぱいあって、みんなで笑って楽しかった。	・作っているときに感じたことや一番心に残ったこと、嬉しかったことなどを話し合わせる。

展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私にもちっちゃくてかわいいころがあったんだなあと思いました。お母さんは、「昔はこんなにかわいかったのに。」とっていました。そして、「けど、今もお母さんにとってはかわいい子どもや。」と言いました。家族にめぐまれて幸せです。</li> <li>・お母さんが、ぼくの小さいときに何をしていたか、ぼくにちゃんと教えてくれたことが一番心に残りました。だから、ぼくは8ページも書けたんだと思っています。お父さんとお母さんが、ぼくが生まれたときどう思ったかを書いてくれたことがうれしかったです。</li> <li>・お父さん、お母さんの一言が一番心に残りました。今まで知らなかったことが書かれているので、びっくりでした。写真についてもくわしく書いてくれて、とてもよく分かりました。この11年史は一生大事にしておきます。</li> </ul>
まとめ	6 振り返りカードに記入する。

カ 先生の振り返り（次の実践に向けて）

子どもたちは、「11年史」づくりをとおして、両親の思いを知り、家族と共に生きていくことの喜びを感じたようである。その思いを、次の「卵殻を育てる」活動に生かし、11年間の成長に対する感謝の気持ちへとつなげていきたい。

キ 振り返りカード

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ( )		
	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	家族とともに生きる喜びを感じることができたか。	
感性を育む	自分の命が両親の願いの結晶であり、その命を大切に生きていくことの素晴らしさについて考えよう。	
想像力の育成	自分の誕生や成長を楽しみにしている両親の気持ちを考え、これからどんなふうに生きていくか考えよう。	
全体を振り返った感想：		
先生から：		
家庭から：		

(2) 1次第7時～課外

ア 本時のねらい

卵殻を大切に慈しみ育てることをとおして、親の立場に立って、命を守り育てることの喜びや苦勞を感じ取る。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

卵殻に、名前を付けたり顔を描いたりして育てることをとおして、命のいとおしさを実感させる。

(イ) 感性を育む

命を守り育てることの喜びや苦勞を感じ取らせる。

(ウ) 想像力の育成

親の立場に立って、子育ての喜びや素晴らしさを想像させる。

ウ 準備物 教員の製作した卵殻

エ 先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ア) 教員自身が卵殻を育てる体験をすることとおして、留意点を確認する。

(イ) 学級通信等を通じて、卵殻の準備や家庭での活動への協力を保護者に依頼する。

(ウ) 事前指導（準備物・活動に当たっての留意点）を確認する。

オ 展開（6時間）

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 卵殻を育てるために必要な準備物や期間等活動の進め方や留意点を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>卵殻の準備の仕方や取り扱い方を説明する。</li> <li>学校だけでなく、家庭でも活動することを伝える。</li> </ul>
展 開	2 卵殻を育てるうえでの工夫点や留意点を話し合う。 <p>(1) 簡単に割れないようにするための工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>服を着せる。</li> <li>行動に気をつける。</li> <li>ベビーカーに見立てた入れ物を用意する。</li> <li>机の上などに簡単に置かない。</li> </ul> <p>(2) 簡単に割れないようにするための工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>顔を描く。</li> <li>名前を付ける。</li> <li>体育の時間や委員会活動の時間に預けられる保育園を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3日間、卵殻を我が子のように大切に育てる活動であることを伝え、そのために気をつけたらよいと思われることや工夫できる点を考えさせる。</li> <li>児童の多様な発想を大切にしている。</li> <li>出てきた意見は、全員に強制するものではなく、自分の活動に取り入れたいものは取り入れていくように助言する。</li> </ul>
	3 3日間、卵殻を育てる体験をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">卵殻を育てた感想を話し合おう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>お母さんの気持ちがよく分かった。とてもしんどかった。最初はかんたんやと思っていたのに。お母さんありがとう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動しているときに感じたことや一番心に残ったこと、嬉しかったことなどについて話し合わせる。</li> </ul>



展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卵を持っていると外で遊びにくいし、机を送るのも大変だった。卵は割れやすいので、あまり遊べなかった。</li> <li>・家族として大事にするようにがんばった。お母さんたちはこんなに大変なんだなあと思いました。お母さんたちに感謝です。</li> <li>・「命を大切にしている」と感じたのが一番心に残った。卵は割れても修理できるけど、赤ちゃんはできないので、命を大切にしたいと思いました。</li> <li>・お母さんの大変さが分かった気がする。卵は動かないしご飯も食べないけど、ぼくは動くしご飯も食べるのでもっと大変。ありがとう、お母さん。</li> </ul>	
まとめ	4 振り返りカードに記入する。	

カ 先生の振り返り（次の実践に向けて）

子どもたちは、「卵殻を育てる」活動をとおして、親の苦勞を知り、育ててもらったことに対する感謝の気持ちを持ったようである。次の「乳幼児とふれあう」活動で本当の命に接する中で、その思いが一層強くなるだろう。

キ 振り返りカード

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ( )		
	学 習 ・ 体 験 の 目 標 ( め あ て )	自 分 の 振 り 返 り
感 動 の 体 験	卵殻を本当の子どもだと思って育てることをとおして、命のいとおしさを実感できたか。	
感 性 を 育 む	命を守り育てることのよろこびや大変さを感じ取ることができたか。	
想 像 力 の 育 成	自分が親になったときのことを思い、子どもを育てるよろこびや大変さを想像しよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		



(3) 2次第1時

ア 本時のねらい

生命の尊さを感じ取り、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする態度を養うとともに、生きていることの素晴らしさに気付き、自分の生命を支えてくれている周囲の人に対する感謝の気持ちを育む。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

乳幼児とのふれあい体験をとおして、命のぬくもりを体感させる。

(イ) 感性を育む

命の誕生の不思議さやかけがえのなさを感じ取らせる。

(ウ) 想像力の育成

自分を支えてくれている周囲の人に感謝の気持ちを持ち、自分の命は、周りの命とつながっているのだということを理解させる。

ウ 準備物 胎児の超音波映像、乳幼児とのふれあい使用する玩具

エ 先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ア) 乳幼児の保護者との打合せ

- ・学習の趣旨を伝え、協力を依頼する。
- ・授業開始時刻とふれあい活動の予定時間、活動の場の様子等知らせる。

(イ) 乳幼児とのふれあい活動にあたっての注意事項や準備物の確認

オ 展開

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 活動の進め方や留意点を聞く。	・爪を切っておくことや活動前に手をよく洗うこと等、衛生面について、十分指導する。
展 開	2 胎児の様子を見る。 ・胎児の超音波撮影による動画を見て、感じたことを発表する。 ・11年間の成長を確かめ、今まで大切に育ててもらってきた自分を感じ、11歳までの年齢のものさしを完成させる。	・母親の胎内で、すでに動き始めている新しい生命の様子を、感動を持って捉えさせる。 ・11年前に誕生してから、ここまで大きくなった自分自身に目を向けられるようにする。
	乳幼児とふれ合おう	
	3 乳幼児とのふれあいをとおして、「いのち」のぬくもりを感じ取る。 ・赤ちゃんは、あったかくて重たいんだなあと思いました。もっと軽いと思っていたのに、思ったより重くてびっくりでした。 ・ぼくは一回だけ抱っこをしました。あたたかかったです。やわらかかったです。	・乳幼児の世話をしたり一緒に遊んだりする感動体験をとおして、いのちのぬくもりを感じ取らせる。 ・幼い頃の自分を想起させ、大事にされていた思い出を振り返らせる。

展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きげんの悪い赤ちゃんを世話するのは大変だった。お母さんは、こんなに大変なんだなあ。</li> <li>・赤ちゃんを抱っこしたことで、けっこう重かったけどぬくもりを感じました。ぼくが小さかったときも、よく泣いたり遊んだりしていたんだなと実感しました。きっとお父さんやお母さんを困らせたと思います。</li> <li>・抱いたときに、やわらかくて、ぬくくて、心がいやされたので、赤ちゃんは人の心をいやす力があるんだと思いました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卵殻を育てた体験を生かし、大切に守り育てることの大変さを想起させ、これまで育ててもらったことに対して感謝の気持ちを持たせる。</li> </ul>
ま と め	4 振り返りカードに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動しているときに感じたことや一番心に残ったこと、嬉しかったことなど記入させる。</li> </ul>

カ 先生の振り返り（次の実践に向けて）

子どもたちは、乳幼児とふれあう中で、子育ての大変さを感じるとともに、いのちのぬくもりやいとおしさを実感したようである。その思いを今後の活動に生かし、いのちについての学習を深めていきたい。

キ 振り返りカード

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ( )		
	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	小さい子とふれ合うことをとおして、命のぬくもりを感じよう。	
感性を育む	命の誕生の不思議さやかけがえのなさを感じ取ろう。	
想像力の育成	自分を支えてくれている周囲の人に感謝の気持ちを持とう。 自分の命は、周りの人の命とつながっているのだということについて考えてみよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

## 10 実践を終えて

### (1) 先生の振り返り

感動が入り口となり、心を生き生きと動かす体験によって「いのちの大切さ」を実感することができるという考えを持って、体験を多く取り入れた学習プログラムを作成した。

例えば、中身を抜いた卵殻を割らないように3日間育てた「卵殻を育てる体験」では、大事に守り育てることの大変さや時には自分のやりたいことを我慢しなければならないつらさ等、体験してみなければ味わうことのできない思いを感じ取らせることができたと思う。さらに、「乳幼児とのふれあい体験」では、短い時間ではあったものの、生命のぬくもりやいとおしさを実感させることができた。

また、家庭や地域と連携し、学習内容の理解や協力を得ることで、学習や体験をより豊かなものにすることができた。例えば、「私の11年史作り」では、家族で生い立ちを振り返ったり装丁作業をしたりする中で、家族の愛情を改めて感じ、喜びを実感することができたようだ。

この実践を通して、体験を多く取り入れた学習が非常に効果的であることを、改めて感じた。やはり、子どもたちに言葉だけで「命を大切にしよう」といくら説明しても、実感は伴わない。これから先、子どもたちが「命の大切さ」を心の中にしっかりと刻み込み、生活の中で実践できるように、このような体験を多く取り入れた学習を継続して行う必要がある。

### (2) 今後の課題

#### ア 授業実践上の課題

「命を大切に」を実感させる教育は、あらゆる機会をとおして行う必要がある。教科や特別活動等の指導と本学習プログラムをどう関連付けていくか、普段から意識し、教材研究をしておかなければならない。また、学習や体験後には子どもたち自身による振り返りの時間を必ず持ち、学びによる変化や成長を自分たち自身で捉えられるようにしたい。そのためには、児童の実態把握から始め、事前の準備や指導を十分に行ったうえで、事後の学習へとつなげていく必要がある。何をどのように振り返ったらよいか明確に捉えられるように、初めから終わりまで、丁寧に学習を進めていく必要がある。

#### イ 家庭・地域との連携についての課題

家庭に、学習の趣旨を理解してもらい協力を得るために、学級通信等をとおして、学習内容を頻繁に伝えたことが大変効果的であった。地域との連携という点では、文章だけでは無理で、直接会って依頼する必要がある。こうした地道な活動によって信頼関係を築くことが大変重要なことだと思う。なぜなら、「乳幼児とのふれあい体験」での協力者を募った際、一人の協力者が新たな協力者を紹介してくださり、連携がよりうまくいくようになったからである。

今後、このような体験を多く取り入れた学習を行うにあたって、家庭・地域との連携を見据えたネットワーク作りを平素より心がけておくことが求められる。

#### ウ 学校の組織運営上の課題

本校のような小規模校の場合、体験活動を行う際の教員の配置が常に課題となるので、年度当初の計画をしっかりと立てることが大切となる。すなわち、本教育プログラムを行う場合、教育課程上にどのように位置付けるか、学校全体でもっと話し合い、共通理解を図っておくことが大切である。

## 11 参考・引用文献

- ・兵庫県教育委員会 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言』 2006
- ・日野原重明 『十歳のきみへー九十五歳の私からー』 富山房インターナショナル 2006
- ・佐藤律子編 『種まく子供たち 小児ガンを体験した七人の物語』 ポプラ社 2001